

## 自己開示情報の親密度と相談教師選択の関係

有 馬 比 呂 志

教育現場におけるカウンセリングは教員以外の人たちによって行われていることが少なくない。カウンセリングをどう定義するかによっては論が分かれるであろうが、ここでは一般的に「問題解決を主あるいは副目的にした話合いの過程」とすると、多くの場合教員以外の人もカウンセリングをしていることになるのではなかろうか。友人などはその典型であろう。また、事務職員や校外指導主事、そしてスクールカウンセラーや学外の心理臨床の専門家などがそういった役割を果たしている。もちろん、校長、教頭、学年主任、担任、クラブ顧問、養護教諭といった様々な先生が、いわゆる「相談にのる」ことも数多くあることは周知の事実である。

従来の研究では、これらの学校カウンセリングに携わる人に焦点を当てたうえで探索的に彼らの特性を検討してきたと思われる。その一つが現場の教師の意識・態度や心理・教育臨床専門家のそれらに関する討論である。たとえば、伊藤(1994)では、学校の教師と心理臨床専門家の学校カウンセリングへの意識の違いを検討し、「学内の専門のカウンセラー設置」に対しては、専門家も教師もともに肯定的であったが、「学外の専門家に委任すること」は教師は専門家に比べて否定的であり、「教師のカウンセラー兼任」に対しては教師はより積極的にとらえているものが2割弱であったのに対し、専門家はほとんどが否定的であったことを報告している。有馬(1995)は、養護教諭を対象にして学校カウンセリングに関する態度を検討し、結果として学内外の専門家にカウンセリングを依頼することや、教師がカウンセラーを兼任することに対しても、養護教諭は非常に積極的かつ肯定的であったとしている。さらにこの中で、教師や専門家を含めた連携のとれたチームカウンセリングの必要性を提唱した。

これらの研究は現在もお進展の方向が見られ、学校カウンセリングに様々な連携の必要性が説かれる(前田,1994など)が、もう一方の視点からの研究も重要ではないだろうか。それは、カウンセリングする人の視点ではなく、カウンセリングを受ける主体である生徒の側からの視点である。児童生徒や学生が校内において相談をする際の特徴を彼らの視点で捉えておく必要があるのではないだろうか。教育相談や学生相談に関わる人たちが自らの考えの中で人を含めた相談環境を整えることがあろう。これは多くの場合「このようにすればいいのではないか」という相談を受ける側の予測に従って計画・実行されていると思われる。その結果、生徒や学生からの来談に応じて彼らの印象反応からその計画が正しかったと判断しているのではなかろうか。しかしながら、これらは推論に過ぎず、来談しなかった人たちの反応は得られない。実験でいえば被験者にあらかじめ実験のパラダイム(計画)を知らせた上でその実験手続きにうまく遂行できる自信のある人だけに実験室

に来てもらうようにし、そうして集めた被験者からの反応が実験者の予測と一致したと報告しているようなものなのかもしれない。来談しない人、来談を希望しているができていない人をも対象としたハード面およびソフト面での環境を整えておくことが必要なのではなかろうか。

このように考えると、児童生徒・学生の人たちの相談に対する態度や特質を捉えておくことが学校における相談の必要条件になるであろう。学校内のカウンセリングを治療的なカウンセリングにとどまらず予防的カウンセリングまでを視野に入れるならば、考慮すべき点の一つになるであろう。そこで本研究では、学生相談における学生の相談する内容（情報）と相談相手となる先生（教員）に焦点を当てることとした。学生はカウンセリングの内容によって、相談を持ちかける相手を変えようとするのか。もしそれらが先生と呼ばれる人たちであるならば、どのような相談をしようとするのかという問題を検討する。相談内容のカテゴリーを名義的に分類する以上に、カテゴリーの持つ心理的な検討が必要と考え、本研究では、来談者である生徒が相談の中で自己開示しようとする情報の親密度によって、相談者の選択に影響があるかどうかには焦点を当てる。自己開示（self-disclosure）とは自分自身をさらけ出すことで、臨床心理学者のジェラード（Jourard, 1961）によって心理学的な研究が始まったものである。榎本（1983a）によると、個人的情報を他者に知らせることが自己開示であり、その中には非言語的なものも含まれると思われるが、これまでの多くの研究では言語的な自己開示に限られていた。自己開示の親密度（以下、親密度とする）とは、話にくさの程度である。この親密度が高ければ高いほど、より話しをする時の心理的抵抗感の割合が増すと仮定される概念である。どういった相談内容ならば誰に相談したいかということに関して、特に相談内容に関してより詳細に検討するため、この概念を取り上げることとする。

## 目 的

開示情報の内容とその親密度を2つの予備調査において測定し、それらを用いて親密度の違いによって相談相手となる先生の選択に影響があるかどうかを検討することを目的にする。

## 方 法

**予備調査 1** 本実験で用いる材料を選定するために予備調査 1 を行う。

（1）目的 本実験に用いる質問紙を作成するための項目を決定することを目的にする。

（2）方法 男子大学生 5 名と女子大学生 5 名の計 10 名を被調査者として次にあげる 3 つの自己開示質問紙に対する回答を求めた。

- 1) 予備調査で用いた質問紙 JSDQ-60 (Jourard, S.M., 1961), KSDQ-24 (神澤, 1989), ESDQ-44 (榎本, 1981) の 3 種類の質問紙を選定した。

- 2) 手続き 自己開示質問紙3種類の項目に対して分かりやすさの程度を3段階で評定させた。その後、分かりにくいと判断された質問紙や項目について理由を回答してもらった。
- (3) 結果 ESDQ-44 に対してはほとんどの被調査者がわかりやすいと判断した。他方、最も読みにくいとされたのはJSDQ-60であった。理由は項目内容が「大統領」などの用語に見られるような欧米人に対応するものであったり、項目の文が長過ぎることなどであった。そこで、ESDQ-44の項目に他の2種の質問紙でESDQ-44に含まれている項目を除いた項目からわかりやすいと判断された7項目を付け加えたものを予備調査2で用いる質問項目とし、それらを表1に示した。

表1. 質 問 項 目

- 
1. 学校での成績の結果の良い悪いについて
  2. 今までに心をひどく傷つけられた経験について
  3. あなたの現在における目標や野心について
  4. 容姿・容貌のチャーミングポイントや嫌いなところについて
  5. あなたの運動神経の良い悪いについて
  6. 性的な衝動を感じた経験について
  7. 友人に対する好きな人・嫌いな人について
  8. 今まで経験してきたあなたの恋愛経験について
  9. あなたの学部・学科の向き不向きについて
  10. あなたは今、どんなものに最もお金を必要としているかについて
  11. 両親に対して好きな点・嫌いな点について
  12. あなたが感じる生きがいや充実感について
  13. 休日の過ごし方について
  14. あなたの好きな本や絵についての感想や意見について
  15. 友だちのうわさ話について
  16. 今、興味を持って勉強していることについて
  17. 感情面を押さえきれないほど情緒的に未熟だと思うことについて
  18. あなたがこれまで作り上げてきた価値観について
  19. 外見的魅力を高めるために努力してきたことについて
  20. あなたの性格上の悩みについて
  21. 性に関する関心や悩み事について
  22. 友人関係における悩み事について
  23. 異性関係における悩み事について

- 24. 興味を持っている業種や職種について
  - 25. あなたの好きな家のスタイルや家具について
  - 26. 親子関係のあり方に対する自分の考えについて
  - 27. 人生についてあなたが感じる虚しさや不安について
  - 28. 芸能・スポーツに関する情報について
  - 29. 最近の大きな事件に関する意見や考えについて
  - 30. 有名人のうわさ話について
  - 31. 知的な関心事について
  - 32. 今までに経験した嫉妬について
  - 33. あなたが理想としている生き方について
  - 34. 今までに気にやんだことのある外見に関する悩み事について
  - 35. あなたの健康状態（頭痛、不眠、疲労、食欲不振）について
  - 36. 性器に対する関心や悩み事について
  - 37. 友人に対して要求したい事について
  - 38. 好きな異性に対する気持ちについて
  - 39. 人生においてあなたが考える仕事の位置づけについて
  - 40. あなたの好きな洋服の種類や色について
  - 41. あなたが感じる孤独感や疎外感について
  - 42. あなたが持っている趣味について
  - 43. 社会に対する不平・不満について
  - 44. 関心のある異性のうわさ話について
  - 45. 好きな音楽や嫌いな音楽について
  - 46. 今取り組んでいる勉強（研究）に関して詳しいところとそうでないところについて
  - 47. 自分の勉強の目標になっている人や、一緒に勉強している人たちへの印象について
  - 48. 理想的な外観について
  - 49. 現在自分が借金している相手は誰か、過去には誰かから借りたことがあるかなどについて
  - 50. あなたが過去になったことのある病気について
  - 51. 男性（女性）として備えていることが望ましいことについて
- 

予備調査2 親密度を決定するために予備調査2を行う。

- (1) 目的 本実験の自己開示される相談内容の親密性を設定する。
- (2) 方法 被調査者は女子大学生18名であった。開示相手（父親、母親、同性の友人、異性の友人、先生など）にどの位の自己開示をするかを、予備調査1で選定した項目に対して、話

さない(0点), 話す(1点), 十分に話す(2点)の3段階評定を求めた。さらにこの結果を榎本(1987)の自己開示内容分類(側面)を参考にして, その側面毎に評定された平均値を算出することとした。このことでどの側面(開示情報)における開示が多いかどうかを見ることができる上, 開示度が高いほど1.0以上の値をとり, 低い場合は1.0未満の値となることが予想できる。

- (3) 結果 開示相手毎の1項目あたりの平均点を表2に示す。これから分かるように, 母親と同性の友人に対する開示が多く, その他の人に対する開示が少ない。開示相手全体に対する自己開示の各側面(榎本,1987)の評定平均値を表3に示す。開示度の高い, すなわち親密度が低いのは項目16, 31, 46からなる「精神的自己の知的側面」, 項目3, 18, 33からなる「精神的自己の志向的側面」そして項目9, 24, 39, 47からなる「社会的自己の公的側面」の3つであった。一方親密度が高いのは項目6, 21, 36の「身体的自己の性的側面」と項目8, 23, 38の「社会的自己の私的側面・異性関係」の2つ情報カテゴリーであることが見いだされた。

表2. 開示相手と開示度

開 示 相 手	父 親	母 親	同性の友人	異性の友人	先 生	親しい先生
開示評定値	0.58	0.87	1.23	0.57	0.38	0.63

表3. 開示情報の側面ごとの開示評定平均値

情 報	精神的自己の3側面			身体的自己の3側面			社会的自己の3側面		
	知的	情緒的	志向的	外見的	機能的	性的	私的同性	私的異性	公的
開示評定値	0.85	0.47	0.95	0.44	0.59	0.11	0.57	0.35	0.80

情 報	物質的自己側面	血縁的自己側面	実存的自己側面	趣味	意見	うわさ
開示評定値	0.41	0.51	0.65	0.63	0.62	0.43

課 題 予備調査の結果から選ばれた開示情報を使用して, 低親密度群には悩み事があることとして「知的関心事について(興味を持って勉強していること, 取り組んでいる勉強に関して詳しいところとそうでないところについて)」, 「職業的適性について(興味を持っている業種や職種について)」, 「目標や野心について(拠り所としている価値観や目標としている生き方などについて)」の3つ, 高親密度群には人に知られたくない悩み事があるとして「性に関する悩みや関心事につい

て（性的な衝動を感じた経験，性や性器に対する関心や悩み事について）」と「異性関係の悩み事について（今までの恋愛経験，関心のある異性の話，好きな異性に対する気持ちなどについて）」の2つの相談内容を想定してもらい，それぞれ，それらのうちのいずれかを相談しようとする際に「親しい先生」「知り合いの先生」「初対面の先生」のいずれかから選ぶとすれば，誰に相談をするかという問に回答することが課題であった。

**被験者** 女子大学生125名を被験者として低親密度条件と高親密度条件の2群に分けられた。

**手続き** 講義中に集団的に実施された。回答時間には制限をせず自己のペースで行わせた。

## 結 果

高親密度群と低親密度群のそれぞれの被験者が相談のために選択した先生の割合（相談者選択率）を算出し，図1に示した。高親密度群（以下，高群），低親密度群（以下，低群）ともに「親しい先生」に対して相談をする場合が最も多く，高群の78%，低群の85%の選択率であった。それほど親しくはないがその先生のことを少し知っているという「知り合いの先生」に対しては，高群の12%，低群の14%の選択率であった。ほとんど知らない「初対面の先生」に対して相談をするのは，高群では11%であり，「知り合いの先生」とほぼ同じ値であったが，低群においては1%とかなり低い値を示した。

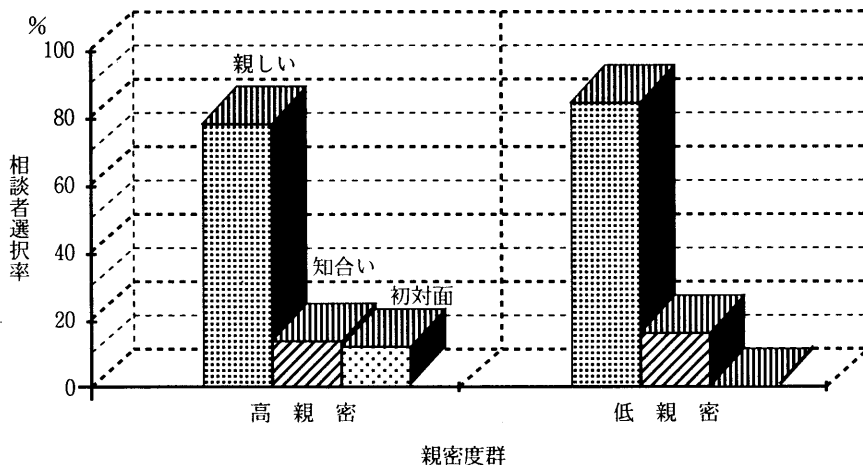


図1. 高および低親密度群における相談する先生を選択率

これらの選択率をカイ2乗検定によって分析したところ，統計的に有意な差がみられ（ $\chi^2(2) = 9.03$ ,  $P < .05$ ），開示内容の親密度の違いによって相談をする先生の選択に違いのあることが分かった。次に，群ごとに相談相手としてそれぞれの先生を選んだ理由の主なものを表4にあげる。

表4. 相談相手の先生を選択した主な理由

親しい先生

- ・信頼できるから
- ・自分のことを理解してくれるから
- ・自分にあったアドバイスをしてもらえそうだから

知合いの先生

- ・あまり仲が良いと反対に相談しにくいから（\*）
- ・親しすぎると相談後、変に気を使ってしまうのは嫌だが、初対面お人はいきなり相談できない
- ・自分をよく知っている人よりも、自分を客観的に見てくれ適切なアドバイスをくれそうだから

初対面の先生

- ・自分のことを知らない人の方が、かえって素直に話せるから（\*）
- ・偏見を持たずに自分のことを受け入れてくれそうだから（\*）
- ・相談事以外では、関わらなくていいから（\*）
- ・新しいものがありそうだから

（\*）：高親密度群にだけみられた理由

## 考 察

本研究の最も興味深い結果は、開示しやすい情報については、親しい先生と知り合いの先生に相談するものがほとんどであったの対して、自己開示のしにくい高親密度条件の被験者の約1割が初対面の先生を相談者として選択したことである。すなわち、自己開示しにくい情報に関連した相談をする時には、必ずしも親しい先生には相談しない人がいるということである。その人たちの割合が1割ということが多いのか少ないのかは、人によって判断が変わるであろう。しかしながら、高親密度と低親密度の相談者選択率に有意差がみられたことから考えられることは、学生相談や学校カウンセリング、教育相談において、学習指導におけるATI（適性処遇交互作用）的な考え方も、成り立つと考えられるのではないだろうか。オールマイティなカウンセラーを目指したり、完全な教師を目指すことを否定しない。しかし、学生や生徒の相談に対する態度・適性の違いを考慮に入れるならば、それを目指すことは困難なことといわざるを得ない。むしろ、彼らの態度・適性に応じられるような、相談の受け皿となりうる多様な先生を機に応じて配置できる体制が求められるのではなかろうか。学級担任やチューターなどの生徒や学生の身近にいて、彼らとの心理的な距離を短くするように努力されている先生は決して少なくない。今回の結果でも、多くの学生が親しい先生に相談することが圧倒的多かった。従って、心理的距離を近づける方向の努力を惜しまないことは多くの場合正しいといえることも本研究から示唆されることである。ただし、表4にあげた理由か

らも分かることは、親しくなる過程の中で、先入観や偏見が生まれたり、あるいは他の人に対する守秘義務などが守られそうもないと判断されれば、それは相談事態において、特に開示することが難しい内容が含まれる相談においては逆効果になる場合があることである。

初対面の先生が良いと回答した人の場合は、構え (set) のなさが良いと予測したのではないだろうか。今までの自分の良い面も悪い面も知らないでいてくれるからこそ、より客観的にあるいは先入観を持たずに話を聞いてくれるという安心感を持たせられたのではないだろうか。さらにいえば、十分理解してくれるかどうかは未定であるけれども、今までにない「新しいもの」を期待させ新たな解決の糸口が見いだせそうな予感を持たせるのかもしれない。教育相談所のカウンセラー、スクールカウンセラー、精神科や心療内科の医師などはいずれの場合も初対面の先生になりうる。学内外におけるソーシャルサポート的な考え方をとること。すなわち、「指導と相談 (カウンセリング) を、理解し合える関係を専門家と学内の教師、養護教諭の間に育てること」(有馬,1996) といった連携の重要性が本研究からも示唆された。今後は児童や生徒を対象とした学校差や発達の側面を加えて検討することが期待される。

## 引用文献

- 有馬比呂志 1996 学校カウンセリングに関する研究—スクールカウンセラーの役割に対する提言—  
広島文教女子大学教育相談センター年報, 3, 54-64
- 榎本 博明 1983a 青年の自己開示 青年心理 37, 141-147.
- 榎本 博明 1987 青年期 (大学生) における自己開示性について 心理学研究 58, 2, 91-97.
- 伊藤美奈子 1994 学校カウンセリングに関する探索的研究—教師とカウンセラーの役割兼務と連携をめぐって— 教育心理学研究, 42, 298-305
- Jourard, S.M. 1961 Age trends in self-disclosure. *Merrill-Palmer Quarterly of Behavior and Development*, 7, 191-197.
- 神澤 創 1989 質問紙法による自己開示の調査研究 教育心理学特集 教育学科研究年報 15, 11-17.
- 前田 基成 1994 学校カウンセリングの実際 坂野雄二・宮川充司・大野木裕明(編) 生徒指導と学校カウンセリング ナカニシヤ出版

付記 本研究の調査・資料収集に野元通子 (中央出版) さんの協力を得ました。ここに記して感謝の意を表します。